

## 学生と地域住民の協働によるコミュニティプログラムの評価

### -高岡市吉久における事例研究その7-

準会員 ○大塚 直\*                      準会員    長竹 凜\*  
正会員    重山 隼人\*\*                      正会員    藪谷 祐介\*\*\*  
正会員    梶田 美結\*\*\*\*                      正会員    田邊 元\*\*\*

重伝建                      まちづくり                      参加意識  
住民参加                      ワークショップ                      地域連携

#### 1. 研究の背景と目的

富山県高岡市吉久(以下、吉久)は、2020年12月に国の重要伝統的建造物群保存地区(以下、重伝建)に選定された。今後の持続的なまちづくりに向け筆者らは、公学生が協働し、住民主体によるまちづくり活動体の形成と担い手発掘に向けての連続ワークショップ「よっさまちづくり会議」を企画・運営している。また、吉久を対象としたフィールドワークをもとに、企画から実践までを行う富山大学芸術文化学部の授業「吉久まちづくりプロジェクト I・II」(以下、プロジェクト授業)を2022年度から開講してきた。2023年度は協働型コミュニティプログラム(以下、協働型CP)としてそれら2つを組み合わせ実施し、授業を履修する学生(以下、学生)と地域住民がチームを結成し、企画から実践までを行った(以下、チーム活動)。

1編(その5)では協働型CPの基礎情報を整理し、その全体像について報告し、2編(その6)ではチーム活動の具体的な活動内容を報告し、その成果と課題を整理した。本編では、第7回よっさまちづくり会議「振り返りしよっさ」後に実施したアンケート調査を分析する。それにより、地域住民と学生という立場の異なるメンバーでの協働によるチーム活動のそれぞれに対する効果と、活動を通して見えてきた課題を整理・考察することを目的とする。

#### 2. 調査方法

第7回よっさまちづくり会議に参加したチーム活動のメンバー25名(地域住民17名、学生8名)に対し、アンケートを配布した。このアンケートは学生と地域住民の協働による効果を検証し、今後のよっさまちづくり会議を運営する上での知見を得るために行った。調査項目は表1に示す。回収数は25であり、回収率は100.0%であった。地域住民と学生の立場の違いによる効果や課題の違いを考察するため両者を分けて集計を行った。

表1 アンケート調査項目

カテゴリー	項目
属性	年代、性別、職業、居住地、参加したチーム活動
今年度のチーム活動	参加動機、満足度、その理由、良かったこと、課題・改善点、継続動機、周りからの評価、参加頻度、連絡頻度、コミュニケーションの取りやすさ、チームに対する評価、自身に対する評価
今後のチーム活動	今後の参加意向、来年度の希望体制

#### 3. 調査結果

##### 3-1. 属性

属性についてのアンケート結果を表2に示す。地域住民の年代は「70代」が41.2%と最も多く、「50代」が29.4%、「60代」が17.6%と続く。構成年代は40代~80代以上であり、その内60代以上の参加者が過半数を占めていることがわかる。学生の年代は「20代」が87.5%、「10代」が12.5%であった。地域住民と学生がともに参加することで、チームは多世代のメンバーで構成されることが分かる。

地域住民の性別は「男性」が88.2%、「女性」が11.8%と男性の割合が非常に多い。学生の性別は「男性」が12.5%、「女性」が87.5%と女性の割合が非常に多い。

地域住民の職業は、「会社員」が47.1%と最も多く、次いで「無職」が23.5%、「パート・アルバイト」が17.6%、「自営業」が11.8%を占める。

吉久地区内に居住する地域住民に対し、学生の居住地は吉久地区外が100.0%であり、「高岡市内」が75.4%、「高岡市外」が25.0%という結果であった。

地域住民のチーム活動のテーマは「通り・軒下の活用」が41.2%、「空き地の活用」が35.3%、「空き家の活用」が23.5%を占め、学生のチーム活動のテーマは「通り・軒下の活用」と「空き家の活用」が37.5%、「空き地の活用」が25.0%という結果であった。

##### 3-2. 今年度のチーム活動について

チーム活動への参加動機は複数回答で求めた。地域住民は「まちづくり活動に参加したいため」と「立場的に参加した方がいいため」と答えた人が14.3%と最も多く、次いで、「空き家活用に関心があるため」「空き地活用に関心があるため」「町並み保全に関心があるため」「他の人との交流のため」「大学や学生が関わっているため」がそれぞれ11.9%を占めた(図1)。学生は「授業の一環として」が43.8%と最も多く、次いで「まちづくり活動に参加したいため」が25.0%、「空き家活用に関心があるため」と「他の人との交流のため」が12.5%という結果であった。「まちづくり活動に参加したいため」という動機は地域住民と学生の両者で多く見られた。

チーム活動への満足度としては、地域住民では、「非常に満足」が23.5%、「満足」が70.6%となった(図2)。

学生では、「非常に満足」が37.5%、「満足」が62.5%を占めた。これらの理由として、①学生や住民との多世代交流、②チーム活動の達成の2つが挙げられた(表3)。

①②のどちらも両者に共通する理由であった。①学生や住民との多世代交流として、地域住民は「普段関わることがない大学生と活動することでいい刺激を受け、新たな感性が磨けたから」、学生は「地域住民との活動を通して交流を深めることができたから」などを理由とした。

②チーム活動の達成として地域住民は「参加者が自分の意見をしっかり発言し、互いにやりとりができた。活動目標を共有して協働できた」、学生は「まちづくり活動に主体的に参加できた」などを理由に挙げた。両者とも満足度は高く、互いの存在とチーム活動の達成感を満足度の理由に挙げていることが共通する。

チーム活動を通して良かったことは大きく3つに分けられる(表4)。

①学生や住民との多世代交流、②知識や気づきの獲得、③継続可能な活動の創出である。そのうち、①②は両者から共に挙げられ、③は地域住民のみから挙げられた。

①学生や住民との多世代交流として、地域住民からは「普段話していない住民や学生とも話せて良かった」という意見が挙げられ、学生からも「普段関わらない年代の方と話すことができた」などの意見が挙げられた。また、②知識や気づきの獲得として、地域住民からは「空き地地用のヒントになった」「吉久の歴史を知ることができた」という意見が挙げられ、学生では「デザインスキルや園芸、空間づくりなどの知識が身についた」などの意見が挙げられた。そして、③継続可能な活動の創出として、地域住民からは「今後に継続できる活動ができた」という意見が挙げられた。

チーム活動を通しての問題点や改善点としては主に3つが挙げられた(表5)。

地域住民によって挙げられたのは、①より多くの地域住民の参加である。学生からは②役割分担の工夫、③活動の進め方が改善点に挙げられた。

具体的には、②について「主体や立場が曖昧であった」「1人1人の負担が大きかった」、③について「活動の進捗度の共有などの管理面がうまくいかなかった」という意見が挙げられた。

チーム活動への継続動機としては、地域住民は「人付き合いの輪が広がるから」が28.9%と最も多く、次いで「活動自体が楽しいから」が20.0%、「自分たちの力で地域を改善していると実感できるから」が17.8%、「自分の成長につながっているから」と「自分が他の人の役に立っていると実感できるから」が8.9%を占めた(図3)。

学生からは「自分の成長につながっているから」が53.3%と最も多く、次いで「人付き合いの輪が広がるから」と「活動自体が楽しいから」が20.0%であった。地域住民は人との交流や楽しさ、地域貢献を挙げているのに対し、学生は自己成長を挙げており、それぞれ異なる

表2 属性

項目	属性		項目	属性					
	n	%		n	%				
年代	地域住民	10代	0	0.0%	居住地	地域住民	西町	0	0.0%
		20代	0	0.0%			寺中町	0	0.0%
		30代	0	0.0%			本町	5	29.4%
		40代	1	5.9%			日の出町	3	17.6%
		50代	5	29.4%			御藏町	6	35.3%
		60代	3	17.6%			第一町	0	0.0%
		70代	7	41.2%			未広町	1	5.9%
		80代以上	1	5.9%			さくら台	2	11.8%
	学生	10代	1	12.5%			高岡市内	6	75.0%
		20代	7	87.5%			高岡市外	2	25.0%
性別	地域住民	男性	15	88.2%	参加したチーム活動	地域住民	空き家の活用	4	23.5%
		女性	2	11.8%			空き地の活用	6	35.3%
	学生	男性	1	12.5%			通り・軒下の活用	7	41.2%
		女性	7	87.5%			空き家の活用	3	37.5%
職業	地域住民	会社員	8	47.1%	学生	空き地の活用	2	25.0%	
		公務員	0	0.0%		通り・軒下の活用	3	37.5%	
		自営業	2	11.8%					
		主婦(夫)	0	0.0%					
		パート・アルバイト	3	17.6%					
		無職	4	23.5%					
		その他	0	0.0%					
	学生								

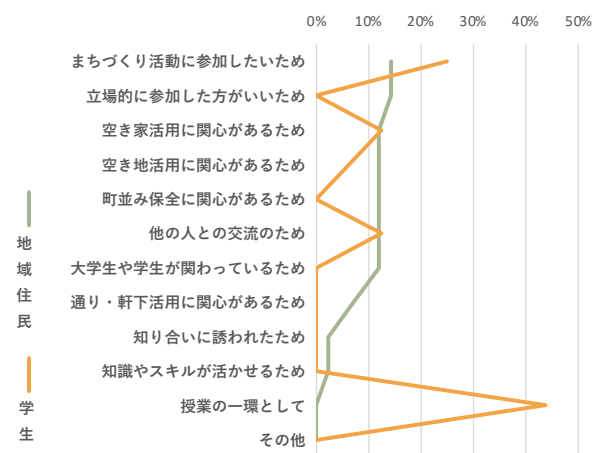


図1 チーム活動の参加動機

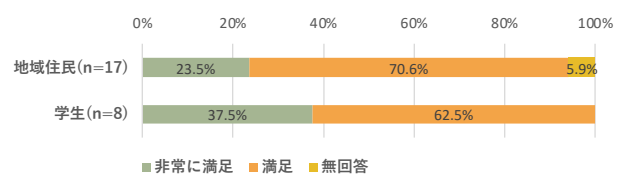


図2 チーム活動の満足度

表3 満足度の理由

カテゴリ	回答者	理由
①学生や住民との多世代交流	地域住民	普段話さない人との会話ができただから
		普段あまり関わることがない大学生と活動することで、いい刺激を受け、新たな感性が磨けたから
		いろいろな人と交流ができたから
	学生	ふれあいを深められて良かったから
		若い学生の考え方を理解するまで時間を要したが、最終的に非常に満足だったから
		異世代交流ができたから
②チーム活動の達成	地域住民	地域の方と活動を通して交流を深められたから
		たくさんの人と交流して色々なことを教えてもらったから
		街の方をもっと巻き込んだ活動をしたが/沢山助けてもらったから
	学生	参加者が自分の意見をしっかり発言し、互いにやり取りができたから
		活動目標を共有して協働できたから
		協力して取り組めた
学生	楽しかったから	
	野菜作りのリーダーとしてやれたから/予想より多く収穫があったから	
	先の展開が感じられるから	

継続動機であったことが分かる。

チームや自身に対する評価を図4、図5に示す。チームへの評価は地域住民が高く、学生が低い結果となった。一方、自身への評価は学生が高く、地域住民が低い。特に、チームに対する評価では役割分担についての項目、自身に対する評価では自身の成長についての項目で地域住民と学生の間大きな差が見られた。

今年度行ったチーム活動への今後の参加意向は、地域住民が「全体の企画運営のお手伝い程度で関わりたい」が58.5%と最も高く、次いで「全体の企画運営に関わりたい」が23.5%を占めた(図6)。学生は「全体の企画運営に関わりたい」が75.0%、次いで「当日の運営のみに関わりたい」が12.5%となった。両者とも参加意向は高いが、地域住民はお手伝い程度で関わりたいと考えている人が多いことが分かった。

来年度のチーム活動の希望体制は、地域住民では「地域住民と学生の協働で取り組みたい」が64.7%と最も多く、次いで「学生と地域住民の協働でもよいがお手伝いとして取り組みたい」が23.5%であった(図7)。学生では「地域住民と学生の協働で取り組みたい」が75.0%と

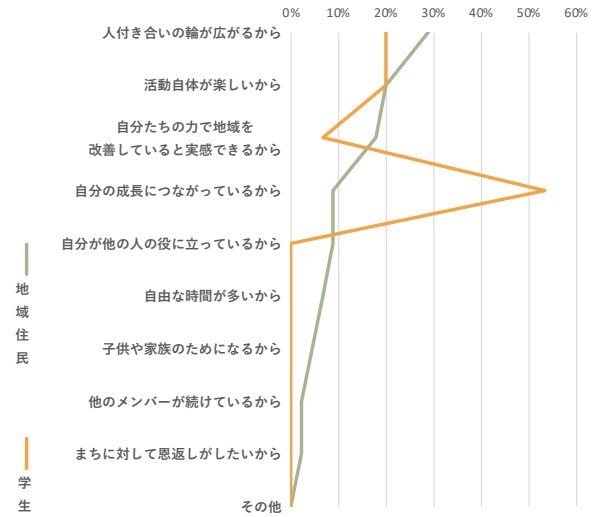


図3 チーム活動の継続要因

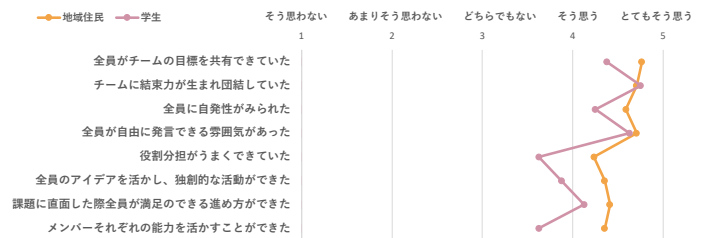


図4 チームに対する評価

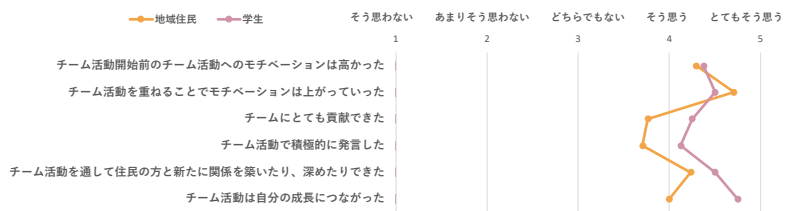


図5 個人に対する評価

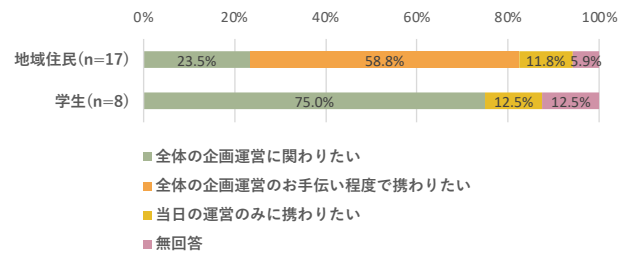


図6 今後の参加意向

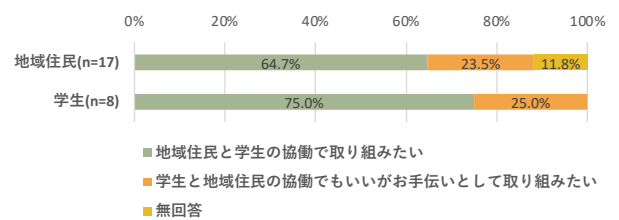


図7 来年度の希望体制

表4 チーム活動のよかったこと

カテゴリー	回答者	具体的な意見
①学生や住民との多世代交流	地域住民	・若い方(学生)との会話が楽しい ・普段あまり関わることがない大学生と活動することでいい刺激を受け、新たな感性が磨けた ・地元、学生との交流が深まった ・普段話してない方とも話せて良かった ・収穫した野菜を住民の方に食べて頂き、余った野菜を配れた ・吉久まちづくり全体に関わりができて良かった ・チーム内で共感を得られた
	学生	・交流が生まれた ・普段関わらない年代の方とお話しすることができた ・多世代交流など、様々な人と会話できた ・子どもと高齢の方との交流が見られた ・その地域の住民の方がとても協力的に参加してもらって、とてもやる気が出た
②知識や気づきの獲得	地域住民	・空き地の利用のヒントになった ・吉久の歴史を知ることができた
	学生	・デザインスキル向上、交流が生まれた ・園芸や空間づくりについての知識が身についた ・自治の在り方を学ぶことができた ・まちづくりに参加できた ・活動に対してのスケジュールの立て方(学外の方がいる場合)
③継続可能な活動の創出	地域住民	・手ぬぐいを作り、次の活用方法に参加者の方から意見が出た。 ・次へと方策が出たのはとても良かった ・今後に継続できる活動ができた

表5 チーム活動の問題・改善点

カテゴリー	回答者	具体的な意見
①より多くの地域住民の参加	地域住民	・もっと住民が参加する努力が必要 ・活動を少人数でしか行えなかった ・参加者を増やしたい ・地域住民の若返りが必要
②役割分担の工夫	学生	・主体の確認が必要 ・立場を明確にする ・一人一人の負担が大きかった ・チームの役割がうまく振れなかった ・メンバーのやる気や時間を最初の段階で共有すべき
③活動の進め方	学生	・活動の進捗度の共有などの管理面がうまくいかなかった ・地域住民とのより積極的な活動が必要 ・話し合いの進め方が難しい

最も多く、「学生と地域住民の協働でもいいお手伝いとして取り組みたい」が次いで 25.0%を占めた。両者とも協働の体制を今後も継続していきたいと考えていることが分かった。

#### 4. 考察

##### 4-1 協働による効果

###### 4-1-1 参加動機を高める効果

地域住民が参加動機として学生との交流を多く挙げている背景には吉久地区内の高齢化があると考えられる。今回の活動では、これまで協議会等のまちづくり活動に参加していなかった参加者も見られた。学生が活動に加わることで若い層との交流が動機となり、これまでと異なる層の参加を促す効果が期待できる。一方、学生は授業の一環として参加しており、地域住民と協働で行う活動を学びの場と捉えていると考えられる。協働が両者の参加動機を高めていることが推察できる。そして、参加動機を満たすことは満足度を高めることにもつながると考えられる。

継続動機に着目すると、地域住民は交流と活動の楽しさを多く挙げ、学生は自己成長を最も多く挙げている。これらの継続動機はそれぞれの参加動機に対応していることから、活動を通して両者がそれぞれの参加動機を満たすことができ、継続参加に繋がったと考えられる。このことは、学生が自己評価において自己成長を高く評価していることから考察できる。ただし、交流と活動の楽しさは学生も継続動機に一定数挙げているため、これらは両者にとって重要であるといえる。そして、今後の参加意向についても学生は特に高いことから、持続的な活動として成立する可能性を示している。

###### 4-1-2 新たな知識・気づきの獲得の効果

知識や気づきの獲得は地域住民と学生の双方でよかったことに挙げられた。地域住民は「学生との会話を通じて新たな感性を獲得した」と実感し、学生は「各チーム活動で必要となった園芸の知識やデザインスキル、地域での自治のあり方などを学んだ」と実感していた。異なる経験や知識を持ち、普段関わることのない両者が協働することで互いに刺激を受け、普段の生活や環境では得られない知識や感性の獲得につながったと考えられる。

#### 4-2 今後の課題・改善点

##### 4-2-1 地域住民の参加の少なさ

地域住民においては、新たな層のまちづくり活動への参加を促すことができた一方、より多くの地域住民の参加が必要であるという課題が挙げられた。また、参加者の過半数を 60 代以上の高齢層が占めていることが明らかとなり、まちづくりの担い手として若い層が不足している。参加者の居住地には偏りがあり、参加者のいない地区が複数みられた。吉久全体では依然としてまちづくりへの関心や意識に差があることが考えられる。活動を

継続することで活動の認知度を高めると同時に、新規参加者が活動に加わりやすくするための工夫が必要である。

##### 4-2-2 地域住民の今後の活動への主体性

今後のチーム活動への参加意向において「お手伝い程度で携わりたい」という地域住民が過半数を占め、活動への主体性が低いことが課題に挙げられる。その理由として、今年度の活動を学生の「お手伝い程度」と認識していた可能性と、今年度のチーム活動が地域住民にとって負担であった可能性の2つが考えられる。前者の可能性に対しては、地域住民に活動の体制と最終的な地域での自立という目標を認知してもらう機会を設け、後者の可能性に対しては、何が負担であったのかを明らかにし、継続可能な活動に改善する必要がある。

##### 4-2-3 地域住民と学生の役割分担

学生のチーム活動に対する評価は地域住民と比較すると低く、特に役割分担についてメンバーの能力を活かすことができなかったと考えていることが分かる。ただし、学生の自身に対する評価は自己成長や積極性、チームへの貢献の項目で地域住民と比べて高い。学生は活動に主体的に関わり、その負担はチームに対する評価に表れているが、自己成長につながっていると考えられる。学生は活動の負担や役割分担を改善点に挙げていたことからこの点は課題であるといえる。

#### 5. まとめ

本編では、今年度の活動において地域住民と学生でそれぞれ参加動機は異なるものの活動が成立し、交流が満足度を高め、継続の意向につながるということが分かった。地域住民と学生のいずれかだけでは成立しないチーム活動を、協働するからこそ実施できるところに意義があると考えられる。協働のチーム活動には、活動の継続と自立を地域に促す効果と、授業としての学生に対する教育効果という、地域と大学それぞれにとって相補的な効果があるといえる。基本的には、協働で取り組みたい人がほとんどであったため、来年度も本年度のかたちを継続していくことが良い。同時に、今まで以上に地域住民が気軽に参加できるような仕組みづくりが求められる。活動は継続することが重要であり、最終的には地域の自立が求められるが、高齢化が深刻化する地域では地域活動の運営力が低下しているため、地域住民だけで自主的に活動をしていくことが難しい。まちづくり活動を地域住民が主体的に取り組み、続けていけるような体制を地域と大学が協働し、整えることが必要である。授業の枠組みを用いた地域住民と学生の協働によるまちづくり活動が持続的な活動として成立する可能性を示したことから、協働型 CP によって、時間をかけて少しずつ活動を育てていくことができる。そうした活動の積み重ねが地域の魅力を高め、さらなるまちづくりの担い手の発掘につながり、まちの大きな変化につながっていくと考えられる。

\*富山大学芸術文化学部 学部長

\*\*富山大学人文社会芸術総合研究所 大学院生

\*\*\*富山大学学術研究部芸術文化学系 講師

\*\*\*\*バウハウス丸栄